

Title	故藤田亮策講師を憶う
Sub Title	
Author	清水, 潤三(Shimizu, Junzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1961
Jtitle	史学 Vol.33, No.3/4 (1961. 4) ,p.189(447)- 191(449)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	史學科開設五十周年記念
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19610400-0189">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19610400-0189</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 故藤田亮策講師を憶う

清水潤三

本塾文學部講師藤田亮策先生が突然に、全く突然に逝かれた。十二月十二日（昨昭和三十五年）の早曉に悲報を聞いて、誰もが驚き且つ耳を疑つたのである。それほど、いつもお元氣な先生であつた。戦後まもない昭和二十二年の四月に史學科の講師となられてから、十三年の長きに亘つて、考古學と博物館學の授業を擔當され、私ども後進を指導されると共に、本塾における考古學の研究を推進され、大小の發掘に率先參加して、自ら指揮をとられた。その功績と本塾のうけた恩恵とは、永く傳へらるべきものであり、本塾に關係する全ての者が銘記すべきものと思う。私は幸いにして、先生が來塾された當初から最後まで、親しく近侍して教えを受け、調査發掘の助手役を勤めて、特別の御庇護を蒙つた。いま諸先輩をさしおいて、追憶の筆をとらせていただくことにしたのも、ささやかな感謝の意を表したいがために外ならない。

故藤田亮策講師を憶う

先生の御郷里は新潟縣長岡市に近い栃尾あたりであつたと聞くが、中學からは東京で學ばれ、一中―一高―東大コースを順調に進まれて大正七年史學科を卒業された。卒業論文は裏日本の海運に關するもので、考古學に専念されたのは大正十一年京城に赴任されてからであるといふ。もつとも先生は家業の醫師たるべく東京に遊學されたのが、強度の近眼のため一高卒業間際に至つて文科へ移ることを餘儀なくされたのであり、眼と紙とが相接せんばかりの獨特の讀書のポーズは、このため生れたのであつて、もし先生のお眼が悪くなかつたら、考古學界も、塾の考古學も、今日とは大きく變つたものになつたであらうし、ひいては私自身の在り方にも大きな影響があつたと思われる。しかし、後にも述べるように、それが本塾のためにも、私のためにも、非常に有難いことであつたことは疑問の餘地がない。

朝鮮における先生の業績は、まことに花々しいものがある。總督府の古蹟調査、同博物館の運営に當つては、ほとんど唯一の専門家として三面六臂の活躍をされ、京城大學の教官としても活動された。世界に誇るべき朝鮮考古學の成果は、すべて藤田先生の働きによつて生み出

されたのであり、後には滿州にまで及んだのであつた。しかし、先生の名は表立つては多く現われていない。纏つた著書も少なく、夥だしい發掘報告書も、ほとんどが協力者の筆に成つてゐる。先生は仕事を立案計畫し、實行にうつすのに忙しくて、と漏らされたことがあるが、それと共に、自己を捨てて他人を立てる、先生の床しい性格によるものであろう。公の問題に關しては他言を顧みず、損得を離れて所信を主張されたが、私事については驚くほど無欲活潑であられた。豪快そうに見えて、まことに細心なところがあり、とぼしい講師料を、多すぎて間違ひではないか、といわれたこともあつた。従つて、名立法といわれる朝鮮の古蹟保存法についても、先生の名は見當らない。まことに今日の時勢には勞のみ多くして恵まれぬことであつたが、その眞價が棺を覆うに至つて輝きを増しつつあるのは、何物にもましてよろこばしいことである。

朝鮮時代初期の先生は、植民地的な人間や年長者を驅使するために、精根を盡されたらしい。私が人と人との問題で弱音を吐くと、當時の苦心談を引き合ひに、叱られもし、また激勵もして下さつた。恐らく、その時の御

苦勞が、先生の人格を形成するのに大きな力をもつてゐるにちがいない。私にとつても、こよなく有がたい教えであつたことを告白する。

さて、朝鮮から引揚げてこられ、上總の山中で晴耕雨讀の生活に甘んじておられた先生を、はじめて中央へ引き戻したのは、塾の間崎先生であつた。かくて週一回、星を戴いて山を下り、満員の列車に揺られて登塾される先生の姿が三田山上に見られた。カーキ色の國民服に雜囊を下げておられたが、その中には御自作の米やイモが詰められ、無事御歸りのメドがつくと、惜氣もなく私たちに分け與えられた。その年の夏にははじめて眞野古墳群にお伴し、年末には同古墳群の大發掘が行われた。次いで加茂、龜ヶ岡などの發掘が連年續けられ、わたくしは先生の嚴しい教育を受けるに至つたのである。先生は、自ら體得するよう仕向けられ、時には逆手／＼と責められるので、温室育ちの私は全くお手上げの形であつた。どうしてオレばかり叱られるのかと情なくなつたものだが、思えば私を一人前にしてやろうとの愛の鞭であつたことが、今になつてヒシ／＼と身にこたえてくる。その間、よそでは随分私を褒めて下さつたらしい。このよう

な弟子に對する愛の表現は、全ての人に對する共通のものであつたらしいが、一度氣がつくと、却て有難さが身に沁みる。そして誰もが、先生の一の弟子であると思ひ込んでしまうのであるが、もちろん術策を弄されたわけではなく、先生の子弟愛が極めて深く、裏面では常にその人をカバーして、かりそめにも陰口をきかれなかつたためであつた。餘人には、ちよつと眞似のできないことである。私の蝦夷研究の結論が、先生の説と全く相反するものとなつた時、學問と個々の結論とは別であるとして、公平な評價をして下さつたことも忘れがたい。

また御自身に物慾がなく、清貧に甘んずる風が誰の目にも明らかであると同時に、他人に迷惑をかけることを憎まれた。發掘に際しても、現地の人の世話になることを好まれず、乏しい資金を節約され、最低の生活に堪えて精力的に活動された。この傳統は、今日われわれの研究室に生きており、將來も生きつづけることであろう。先生の眼が廣く開け、東亞はもとより、西歐の考古學にも通じ、古くは舊石器時代から、下は歴史考古學、美術史の分野にまで造詣が深く、ドイツ語に堪能であつた上に、人間的にも敬慕するに足る先生を迎え得たことは、

本塾の幸運であつたと斷言し得る。その後の先生は藝術大學の教授となられ、幾多の大學の講師を兼ねられたが、一昨年奈良國立文化財研究所長に轉ぜられても、われ／＼の懇請を容れて、なお本塾に籍を止められた。これは、最初に上總から招いてくれたところだから、というお氣持からで、私どもはその義理堅さに驚き、且つ喜んだことであつたが、學術會議會員や考古學協會委員長をはじめ、あまたの役職を兼ねられて、あまりのお忙しさに疲勞の蓄積されていた先生の死期を早めるのに一役買つたのではないかと悔まれる。しかも、先生は「慶應の考古學」を確立するためには、まだ／＼必要な人であつた。そして先生御自身も、もつと力をかけてやろうと思つておられたことを、私は確信している。かように塾を愛され、われ／＼を愛され、塾における考古學研究の發展を念願として下さつた先生の御好意と、單に學問の分野に止まらなかつた教訓を長く後の人びとに伝え、われ／＼の研究のレベルを増々向上させることが、残された私たちのなすべき務めであり、先生の靈に應える唯一の道であることはいふまでもない。